

「その一滴を、忘れない」

しまねだいがくきょういくがくぶぞくぎむきょういくがっこうこうきかてい 九年
島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程
あおやま にこ
青山 和

蛇口をひねれば、水は出る。透明で、冷たくて、何の迷いもなく流れ続ける。その光景を、私はこれまで何度も見てきたのに、一度も立ち止まったことはなかった。朝、顔を洗うときも、歯を磨くときも、水はあたり前のようにそこにある。のどが渴けばコップに注ぎ、特に何も考えずに飲む。水は「あるもの」であり、「なくならないもの」だと思っていた。

しかし、沖縄での平和学習が、そのあたり前を崩した。私は今年の四月、修学旅行で沖縄を訪れ、平和学習の一環として糸数壕というガマに入った。自然にできた洞窟で、戦時中、人々が身を潜めていた場所だ。ガマの中は、想像していたよりもずっと暗かった。足元もよく見えず、少し動くだけで不安になる。空気は湿っているのに、胸の奥が詰まるようで、思わず息を浅くした。しばらく目を凝らしていると、岩肌の一部がわずかに光って見えた。近づくと、水がにじむように湧き出ていて、ゆっくりとしずくになって落ちていた。別の場所でも、ぽたり、ぽたりと水が垂れていた。その一滴は、とても小さくて、頼りなく見えた。けれど、目を離すことができなかった。それは、この暗闇の中で確かに生きているもののように感じられた。

「ガマを探るか、食料を探るか、そのどちらかしかなかった。」

前日の平和講話で聞いたその言葉が、不意に胸の奥によみがえった。外では戦闘が続き、いつ命が奪われるかわからない。その中で、人々はこの場所に身を潜めていたのだと思う。のどが渴く。けれど、水は簡単には手に入らない。探しに行けば危険がある。それでも、生きるためには必要だった。私は、目の前のしずくを見つめながら考えた。もし、自分がここにいたら。どれほど、水を求めるだろうか。そのとき、はっきりと思った。その一滴は、命だった。それに比べて、自分はどうか。歯を磨きながら、水を流しっぱなしにしていたことがある。髪を洗いながら、シャワーの水を流しっぱなしにしていたこともある。その一滴の重さも知らずに。

沖縄から松江に帰った日、家でいつものように蛇口をひねった。そのとき、ほんの少しだけ手が止まった。流れ出る水を見てみるとガマの中で見たしずくが浮かんできた。同じ水のはずなのに、その意味は大きく変わっていた。水があるということは、ただ便利なだけではない。安心して眠れること。そのあたり前が守られているということだ。あのガマの中では、水は命だった。だからこそ、今こうして自由に水が使える生活は、平和である証なのだと思う。だから私は、意識して水を止めるようになった。歯を磨くときは水を出しっぱなしにせず、コップにくんだ水で口をゆすぐ。手を洗うときも、必要な分だけ出して、すぐに止める。ほんの小さなことだが、その一滴を無駄にしないための行動だと思う。

私が暮らす松江市は、「水の都」と呼ばれるほどに恵まれたまちだ。宍道湖や中海が身近にあり、日々の生活の中で水の存在を感じている。そこで育てられたしじみやサルボウガイをおいしく味わうこともできる。だからこそ、その豊かさをあたり前にせず、水を大切に使う意識を持ち続けたい。

そして、この気づきを自分だけのものにせず、家族や友達にも伝えていきたいと思う。「水を出しっぱなしにしないようにしましょう」と声をかけたり、一緒に意識して行動したりすることもできるはずだ。小さなことでも続けていけば、その意識は広がっていくと思う。

蛇口から流れる水を見るたびに、あの一滴を思い出す。

その一滴を忘れない。